

妻は知っていた



妻は知っていた

圓地文子



講談社版

妻は知っていた



昭和34年5月30日 第1刷発行 ￥260

著 者 ^{さん}圓 ^ち地 ^{さん}文 ^こ子

発 行 者 東京都文京区音羽町3-19
野 間 省 一

印 刷 者 東京都文京区関口町140
盛 英 信

印 刷 所 東京都文京区関口町140
慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式会社 講談社
音羽町3-19

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。(黒柳製本)

© F.Enchi 1959

妻は知っていた

装
幀

加
山
又
造

赤ん坊の秀子がやっと寝ついたのを見定めてから、多緒子はそっと自分達の借りてゐる六畳を出て、廊下一つ隔てた茶の間へ入って行った。

案の定、食卓の上には皿小鉢が食べ荒らしたままになっていて、中学一年生の鉄也も小学生の敏子も姿が見えなかった。

どうもさっきから静かだと思ったが、やっぱり向う横町の友達の家へテレビを見に行ってしまったのだらう。

「晩御飯がすんだら必ず一時間は勉強させてよ。テレビを見に行かせないでね。野球のナイターがあると、鉄也はまるで夢中なんだもの……それに長くいると、つい戸倉さんとこだってお菓子を出してくれたりして、あとで挨拶しなきゃならないから……」

義姉の津奈子は店へ出て行く前、いつも厳しく言い置いて行くのだが、多緒子にしても乳呑子の秀子を抱えているので、なかなか姉のいうように甥や姪を監督することは出来ないのである。

「困ったわね、姉さん、帰って来ると又、怒るわ……」

多緒子は情けなさそうにひとりごとを言って、縁側から外を見た。秋の宵の夜気がしんめり肌に快く、狭い檜葉垣の向うには道を隔てて向いの家の窓の灯がこの季節特有の人懐かしい明るさに灯っていた。ラジオの歌謡曲の抒情的な歌声が賑やかな笑い声と混ってその窓から聞えて

来た。いかにも家族が団欒している感じだった。

お向うの山庭さんは御主人の帰りが早いからいつも賑やかなのだと多緒子は思った。すると早く父親に死に別れた鉄也や敏子が、母親の帰りの晩い家に居馴じまない子供心のうそ淋しさも多緒子には納得出来るのである。

嫂の津奈子は死んだ夫のやっていた保険会社の代理店を女手で引きついで結構切りまわしているが、商売柄多額の金を家に置くのを不安がって、町中の交番のすぐ裏に店を置いて、会社の守衛上りの爺さんを留守番に雇っている。自分は毎日、出向いて行ってその店で事務もとるし、あとは大方、契約の切り換えや集金に顧客先きをまわっているから、帰りは悪くすると八時九時になるのである。

多緒子の夫婦が嫂に頼まれて、この家の一間を借りるようになったのも、津奈子には外出の多い自分に替って、多緒子に、子供達の監督をして貰い度いつもりもあった。洗濯や掃除には通いの小母さんが夕方まで来ているので、多緒子は一応普通の間借り人並みのわけであるが、夫の千束の薄給なのを察して間代も普通の半分に負けてくれているのを思うと、いくら親類といっても、多緒子は義姉に対して、幼い甥や姪を暗に頼まれている精神的な荷を感じるのである。

それにこの頃は夫の菊雄の帰日も晩い。勤め先きのデパートの家具部の仕事が忙しく、毎日製作所へまわるので、晩くなるのに一向不思議はないのだが、乳呑子の秀子が碌に父親の顔をみて笑う時もないのを見ると、多緒子は何となくもの悲しくなることがあった。

「パパ、早く帰って来るといいわね、秀子ちゃん、淋しい淋しい……」

多緒子は赤ん坊にあてて言いながら、実際はその半分は「多緒子淋しい淋しい」と自分の感情を歌にしているのだ。

「仕方がないわ……ちょっと迎えに行って来ようかしら……」

そう云って、土間へ降りようとした時、門に靴音が停って、格子戸ががらりと開いた。

「只今……」

「あ、姉さん、お帰りなさい」

女にしては大柄な津奈子は黒っぽいスーツをすっきり着こなしていると、結構女盛りの艶が身体に溢れて見えるが、靴は踵の低い野暮な黒靴だった。毎日集金に歩きまわるのにタクシーに乗っていたら、算盤に合わないから、靴だけはぴったり合った丈夫専一なのを選ぶのだといつも言っている。

「傘を持って出るといつも晴れるの……レインコートと両方お荷物になってしまったわ」

そんなことを元気よく云いながら茶の間へ入って来た津奈子は、子供達の姿が見えないのを見ると、忽ち顔をしかめた。

「又、出かけたの？ 二人とも……」

「そうなのよ、姉さん、……私、御飯のあと、秀子にミルクをこしらえてやったりしていて、やっと寝ついたと思って、出て来て見たらもういないのよ、二人とも……」

「困るわねえ、又、ナイターのテレビでしょ。敏子なんか解りもしないのに、結構、兄ちゃん

にくっついて行くんだから……もうすぐ試験じゃないの……」

津奈子は多緒子に叱言をいうように眼を据えていたが、途中で気づいたらしく、

「仕方がないわね、多緒子さんにこんなこと云っても……御免なさいね」

と明るい声で笑った。感情の切り換えの巧みなのは津奈子の性格のさっぱりしているためでもあるが、一方から見ると、他人相手の職業を持っていることが性格を事務的にするのだろうと、多緒子は時々義姉を羨しく眺めることがあった。

「姉さん、御飯は？」

「今日は晚くなるのが解ってたから、新宿でライスカレー食べてから一軒寄ったの……うるさい家でねえ、七時半きっかりに來いって云って、いってみたら三十分も待たせられたわ」
多緒子の注いで出すお茶を一口飲んでから、津奈子はハンドバッグから出したパールに火を点けた。

「菊雄さんもまだ？ 晚いわねえ」

「ええ、本当に厭になるわ。このところずっと、お店から製作所へまわってるのよ。室内装飾の秋の展示会が来月のはじめっからでしょ。うちの店の家具やセットのデザインは定評があるだけに他所からケチをつけられると大変らしいのね。部長さんから主任さんから皆大崎の工場へ詰めかけてるらしいわ……」

「菱井デパートあたりになると、ちょっとしたことがとても大きい反響になるものね。菱井の品物だのにこれこれだって……すぐ文句が出るのよ。私も時々きくわ。いいえ、菱井のってわ

けじゃないのよ。一流のデパートって皆そうよ。でも、菊雄さんは室内装飾の設計家としては有望だって評判だから頼もしいわよ。うちでも兄さんが早く死んだんだから、鉄也がこれから上の学校へ行くにしてもちゃんとした親類があればどんなに頼もしいか知れない……何と云っても金とコネの世の中だものね」

上着をぬいでブラウス一枚になった津奈子は、長火鉢に肘をもたせると、胸のあたりがたふぶりして、主婦らしい家馴染んだ姿勢になった。

「コネって何？ 姉さん」

と多緒子はいつも濡れているような色のいい唇に柔和な笑いをためてきいた。

「コネを知らないの？ 多緒子さん……へえ、あなたお勤めしてたときかなかった？」

「知らないわ。私のいたのは○美術館の事務でしょ。そんな話する人なかったわ……女の人も少なかったし……」

「そう……矢張り、美術館なんて、世離れてるのかしらねえ。コネってのは、コネクション……つまり連絡、関係……そうね、昔で云ったら『引き』って云うのかしら……この頃の世の中って、学校出たって、コネがなければ絶対にいいポストは得られないのが常識なのよ」

「そうかしら……実力があってもコネが無ければ駄目？ そんなことないでしょう」

と多緒子は言ってみた。津奈子の言い分を半分は肯定していて、同意するのは何となく厭だった。

「ところが絶対よ」

と津奈子は強く首を振った。

「私のお顧客なんて、実に千差万別な階級があるでしょう。そうしてずつつづけて行ってる中に、火事ばかりでなくその家に色んな変化が起るわよ。私なんか女だから、長くつづけている家は奥さんとは大抵懇意なの。普段は余り言わない人でも、転勤で地方へ行くとか、息子さんが結婚するとかいう変り目にはよく、身の上話が出るのよ。そういうのきいてても、男の勤めさきなんか、親がいいとか、結婚したお嫁さんの実家がしっかりしてるとか云うと、きっと本人に割のいいことが廻って来るのね。例えば転勤にしても大阪とか名古屋とかいう大都市へ行くし、お勤めさきから、外国へ行くような場合だって、必ずコネのある人がさきへまわるのよ。デモクラシーだなんて云っても随分いい加減なものだって、この間も片親で息子を大学まで卒業させた奥さんがこぼして居なすったわ。そういう話きくと私は他人ごとと思われないのよ」

「そりゃそうね、菊雄もよくそう云ってよ。お店なんかは組合があるって云っても、御用組合みたいなんですってね。だから人事のことなんかでは、よくよくでないしと闘争なんかしないそうよ。そうすると矢張り、姉さんの今のお話みたいにコネのある人が何かと先きになるんですって……」

「不公平なものよ。世の中なんて……でもそれをぶつぶつ言ったら、こっちの負けよ。何と云っても頑張って、やるどころまでやり通さなければ……菊雄さんなんかデザインがいいんだから……骨折れば成功するにきまってるわ」

津奈子はそう云ってから、にこつと笑って見せて、

「先き行き何分よろしゅう御頼み申しませ」

と大阪弁で云った。

「厭だわ、姉さん、コネなんて言ったら、うちのパパなんかまるで駄目よ。それに菊雄をあそこへ入れさしてくれた菱井の顧問の梶先生は亡くなってしまうたし、他の部員は皆、あそこ生えぬきのヴェテランなの……随分間尺に合わないことが多いらしいのよ。他にいいところがあれば変り度いって云ってるわ」

「あら……でもそれは考えものよ。菱井は何と言っても信用の点では満点ですって……銀行の人の話をきいてもそうだわ。ちょっと条件のいいぐらいで小さいところへ動いたりすると、あとで取りかえしがつかないわよ」

「そうなのよ。それを思うから辛抱してるのよ。菊雄だって独身の時だったら、厭なことがあるばおいそれと辞めもするでしょうけれど、私や秀子がいるとねえ」

「そりゃ、当り前よ。子供の小さい中はおんただって副職なんて持てないわ。そんなこと、このごろの旦那さまはよく理解してるわよ」

津奈子はさばさば言った。

その時、勢よく格子があいて、てれ隠しに、わアわア、大きな声で笑いながら鉄也が妹の敏子とからみ合って入って来た。

「お帰んなさい！」

「お帰んなさい！」

「お帰んなさいじゃないわよ……」

津奈子は急にしゃんと居直って、にやにや笑って妹の肩を抑えている鉄也をみた。

「鉄ちゃん、どうしてそうお母さんの云うことをきかないのよ。夏休みだって毎日テレビばかり見に行っていて、お終いの二三日に宿題で大慌てしたじゃないの……多緒子叔母さんに手伝って貰ってや々とゴマかしたの、もう忘れたの……知りませんよ。試験の前になって、又泣きべソかいたって……」

鉄也は母親の見幕にだんだん笑っていた顔を萎ませた。敏子も兄に肩を抑えられたまま、キャラクターをほおぼった口をもぐもぐさせて、チロチロ多緒子の方をみている。

敏子に泣き出しでもされたら大変だ。多緒子は、敏子の泣き声で、六畳間の秀子の眼を覚まされる方が心配で、慌てて仲へ入った。

「姉さん、まあ、まあ、いいことよ。鉄ちゃんも、ナイターさえ終ればもう戸倉さんそこへ行きはしないわね。お母さん、御仕事から帰って来て心配してらしたのよ。ね、すみませんでしたって云うの……」

多緒子がやさしくそう云うと、敏子がまずちょこんと坐って、

「御免なさいね。お母さん」

と云って、津奈子の膝の手を握って振った。

「御免！」

と鉄也は号令のような声と一緒にびよこんとお辞儀を一つして、勉強部屋の四畳へかけ込んだ。

「何でしょう、まるで……『報告終り』みたいだわ」

と云いながら津奈子は、敏子の肩を抱いて、もう笑い出している。

多緒子はほっとして、六畳へ帰って来た。

その晩、菊雄の帰りは一時に近かった。

女所帯の物騒さを津奈子が不安がるので、十時過ぎる時は戸閉りを全部して、菊雄は六畳に面した庭口の潜戸から、帰って来ることにきめている。それもねじ鍵をかけて置いて、ベルを外から鳴らすと、多緒子が出て行くことにしてあるのである。

多緒子は秀子が朝五時頃には起き出すので自分もその時間に起きてしまう。従って夜ももう十時を過ぎると睡気がさして来た。

でも横になるとぐっすり寝てしまう心配があるので、ベビーベッドの傍の籐椅子に凭りかかって、編物をしているのだが、いつの間にか編棒が動かなくなつて、うとうとしてははっと眼が覚める……

この横町には自動車は入らなかったが、警笛が角でなると、きまって近所の犬が吠え出し、多緒子もはっとして、外の気配に耳を澄ますのである。菊雄は自分でタクシーに乗って来るこ

とは殆どなかったが、余り時間の晚いときは店の運搬用の乗用車が店員を次々家へ送り込んでくれることがある。

今夜も多分それで帰るのだろうと十二時の時計がうった時、多緒子は思った。店の自動車の場合には、横町の角でとまると、この方面のもう二三キロさきに住んでいる同僚の矢崎が必ず車に居残るので、何か一言二言、挨拶の声が聞えてから自動車の動き去るのが例である。

一寝入りの秀子がお襦袢が濡れたのか、けたたましい声で泣き出したので、多緒子は急いでベッドへよって行った。

裾をひろげて、むっと温い匂いのするお襦袢を股の間からひき出して、手早く新しいのに替えてやると、秀子のくしゃくしゃに泣きゆがんだ寝顔がだんだん風船のふくらむように円かになって、真赤になった顔色も軟かい白さにかえった。うすい軟かい頬へ多緒子は顔をよせて、思わず唇を押し当てた。秀子は無心のままに、母の愛撫に応えるように、にっと笑った。

その時、自動車の駐る音がした。しかしそれはいつも店の何人かが乗りあって来る大型の車ではないらしく、静かに駐ったと思うと又音もなく滑り去って行く様子である。

ああ、あれはきつと、角の貿易会社の重役の家に着いた車に違いないと思って、がっかりしたが、その途端に、庭口のベルがジージーと二つ間を置いて、菊雄のいつも押す鳴り方で鳴ったので、多緒子は慌てて庭へ降りた。

「晚かったのねえ、今夜は特別……」

多緒子は菊雄の入って来た潜りのねじ鍵を閉めながら言った。

菊雄は雨戸の一枚閉め残してある縁側に腰を降ろして、靴を脱ぎながら、

「めっちゃめっちゃだよ。忙しくって……まるで人間じゃないや」

と言った。

「御苦労さまね、疲れたでしょう。私、あんまり晚いから、そんなことないと思いながら、もしや自動車の事故でも起りはしないかと思って、……つい一人でいると厭な想像をしてしまうのよ」

多緒子は、菊雄の脱ぎすてる上着やズボンを手ばしこく片づけながら、

「姉さんそこ、お風呂が今夜はたたないのよ。もう少し早いと銭湯へ行ってきたら、さっぱりするの……」

と残念そうに言った。

菊雄は手を振って、

「いいんだ、いいんだ……風呂なんか要らないよ。それより、ベビー、どうした……元気でねたかい？」

「ええ、ええ、もう足がそろそろ出来出したから、サークルに入れて置くと一人で掴ってくるくる廻っているわ。今日は保健所へ連れて行って見せたら、女兒の平均体重より五百グラム多いんですって……私に似れば瘦っぱの弱味憎なのに……秀子はあなたに似たのよ」

多緒子がうれしそうに云うのをききながら、菊雄はタオル寝巻きをひっかけて、ベビーベッドへよって行った。

薄い毛布を踏みぬいで、秀子は人形のようにくくれた可愛らしい足を投げ出して仰向けに寝入っていた。

「可愛い顔をしてるね、……眼をつぶってる顔ママにそっくりだよ」

「あら、そんなことないわ。額つきがあなたによく似てるって姉さんだって言うわよ」

「そりゃ二人の子供だもの、どっか似てるだろうさ……しかしこの寝顔は君にそっくりだよ。自分の寝てる顔知りゃしないだろう」

「そりゃそうね」

と云いながら、多緒子も夫の肩に手をかけて、うしろから秀子の寝顔をのぞき込んだ。

「いやだわ……何、ひとり笑してるの？」

「何でもいいよ」

「よくないわよ。ひとの顔見てにやにや笑うなんて、気持ちが悪いわ」

「だって、秀子の寝顔をみていたら、君とはじめて、接吻した時の顔を思い出したんだ……あの時分の君の唇はベビーみたいに軟かだったよ」

云いながら、菊雄はぐるりとねじ向いて、自分と似たようなタオル寝巻きに常よりふくらんで見える妻の肩を抱いた。多緒子はいつものように柔和により添って来て、菊雄の首に手をまわしたが、夫の冷い唇を噛みとるように烈しく吸ったとき、うっとりして夫の腕に頭をもたせかけた。

「パパ、随分いい匂いしてるわね」